

ファブリック製品とジェンダーに配慮した生産 — フェアトレードの試みを通じて

Fabric Product and Gender Sensitive Manufacture-through Fair Trade

高 原 幸 子

Sachiko TAKAHARA

1. はじめに

フェアトレードは、南と北という資本主義世界システムの開発経済のなかで、オルタナティブな経済を提案し、志向する試みと述べてもいいだろう。公正な貿易や格差を生まない経済システムとして捉えることもできる。

フェアトレード（連帯貿易、草の根倫理貿易）の歴史は、開発経済のなかで別様の経済活動を志向することで60年余り経つ。コーヒーや紅茶やチョコレート、果物といった産品と同様に、手織物や染物といった布製品の衣服や小物類がフェアトレード産品の主要な製品となっているが、それは作り手の多くの女性達の生産者グループを支援する仕組みにもなっている。

本稿は、ほぼすべてがハンドクラフトである布製品の生産と流通と消費にどのようにに社会倫理的視点が影響し、実際に販売が行なわれているか、また布の象徴作用による物品や空間の意味変化を問い直すことを目的とする。

もともとはチャリティ活動や国際協力の活動として行なわれ始めたフェアトレードだが、途上国の生産者に先進国との貿易機会を設け、生産者の受取額を圧迫する仲買人の支配を通さないオルタナティブな貿易組織が誕生したことが発端となる。

この過程のなかで、日常の営みとして布織物、刺繍製品といった工芸品などに携わる人々が、自助グループを組織して販売のための活動を始めたことがある。こうした営みと先進国の買う選択という倫理活動がどのようにつながるのか、またオルタナティブな経済活動としての位置づけがフェアトレードから導き出せるのか、を考えてみたい。

地域のコミュニティにおいても、もとは奴隷貿易の港であったイギリスの港町がフェアトレード・タウン¹⁾としてフェアトレード産品を町の商店に置くことを推し進めていたり、こういった活動が日本のなかにも広がりつつある。フェアトレード・タウンは、フェアトレードを広げるために、市民団体をはじめ行政、企業、商店、学校など地域社会が協力して自治体とともに進める街づくりのことである。世界には、ロンドン、ローマ、パリなど1400以上のタウンがあり、日本では熊本市が2011年にアジア初のフェアトレード・タウンとなった。名古屋市も、地元議会による決議と首長による意思表示により、今年からフェアトレード・タウンとなった。フェアトレード・タウンになるための基準は、運動推進団体が発足していること、地元でも認知度が高まっていること、地元の企業や団体、学

校、市民組織が賛同していること、地域の経済や社会の活力が増し、絆が強まるように地産地消やまちづくり、地域活動、障がい者支援などのコミュニティ活動と連携していること、フェアトレード産品が買える地域の店（商業施設）が増えていること、地元議会による決議と首長による意思表示が行われていることである。

こうしたタウンとしての営みは、コミュニティの閉塞感の扉を開き、伝統技術を受け継ぎ、地域の活性化を行うことが、モノの交感の次元において為される可能性がある。

またこういった空間編成が、布製品とどのように融合し、象徴作用が働くかを考察し、今後のコミュニティの在り方の一つの展望としての意義も考えたい。

筆者はこれまで、タイの移住女性が観光産業等に誘引され、性産業に従事する移動労働の実態とそれへの支援活動に関与していたが、こうした実態へのオルタナティブな生産としてファブリック製品の営みがなされていたこと、そしてこうした製品が国を越えた国際協力の位置において重要な活動とされ、その販売が先進国でなされていたことを通じて、それがフェアトレードであると認識したという経緯がある。

第三世界の近代化の過程には、自然、手仕事、音楽などの変化において機械的方向性が伴われる。こうしたなかで、大量消費物の生産へと駆り立てられる方向で人々の移動も誘発され、資本統治の集中が成されていくが、そのなかで自然のリズムを取り戻すことが、社会正義を通じた活動としてのNGOやNPOのエンパワメントの取り組みにはあったと少なからず述べることができる。

このような経過において、特に筆者が関与していたアジアからの移住女性が活動として布製品を製作していたことは、この自然のリ

ズムという営み、もしくはサステナブル（生存維持、自給）生産という呼び名に近似していた。しかし、もう一方において小規模のフェアトレード団体による販売を越え、大企業がフェアトレードに関与するということは、こうした製品の生産のされ方も変化していく、ということの意味していた。もちろん、人文社会科学において「自然」の冠が付く形容詞には、一定以上の留保が必要なことは言うまでもない。近代性の社会構築において、自然が更に捏造されるという解釈も必要である。

NGOのグローバル・ヴィレッジのフェアトレード部門が株式会社として独立した「ピープル・ツリー」では、その衣料品の大半はインド北西部グジャラート州の小規模農家のネットワーク「アグロセル」の原綿（オーガニック・コットン）が使用されている。その農家の95%は機械をほとんど使わず、手作業で耕作、収穫しているという。フェアトレードの割増金と合わせて一般のコットンの価格に最大30%を付加した金額で売ることが出来て、各工程に多くの人が関わる必要があるために雇用を生み出せるという。化学肥料を使用した場合は薬品を散布するのみだが、オーガニック農法の肥やしを使う場合には、肥やしを作るために2日かかり、トラクターの代わりに牛で畑を耕すためには2～2日半かかる。また、化学的な農薬を使わずとも、農地の一部に天然の虫除けの木もあるという。こうした農法とともに、織り手や染色職人、刺繍職人ともに手仕事をして1000人以上の雇用を生み出している。

本稿はこうしたフェアトレードの営みを生産者の組合とともに、消費者の行動に関しての営みをも掘り起こそうとしているが、こうしたなかで、フェアと呼ばれる社会公正の懸け橋が成立するのか、また自然のリズムという方向も成り立つのか、探求したい。そのた

めに、タイ、パヤオ県チェンカム郡メータム村にあるバーントーファン（Baan Tho Fan）という洋裁プロジェクトの取り組みを見ていくことにする。

2. フェアトレードと国際協力

国際開発や国際協力分野のなかでフェアトレード団体とその仕組みに関する公正貿易についての解説は多く見受けられるが、やはり経済活動としての社会倫理をジェンダーと近代性の観点から見出す必要性もあるだろう。ゆえに、規模と多寡においてのみはかるのではない社会倫理を問い直す可能性を重視していきたい。

フェアトレード団体であるピープル・トゥリーの創始者サフィア・ミニがフェアトレードファッション（倫理的衣服）に関する提案の書を出版している。ブランドファッションや最近のエシカルファッションの流れとの関わりから、フェアトレードの衣服がどのように生産者の生活を守るしくみに貢献することができるのか、またその服を買い、着る人々の行為がどのようにフェアトレードとつながるのかについても未知数ではある。日本では、ネパールの生産者団体とのフェアな取引を1990年代から行ってきたネパリバザールや、フィリピンやバングラディシュの国際協力NGOが果物や布製品のフェアトレード団体も兼任するようになったり、神戸のAWE Pという女性の自立支援の団体がフィリピンを中心とした女性の布製品の販売を行っており、日本の国際協力の道筋においてフェアトレードを進めてきた背景がある。それとともに大企業が扱うフェアトレード製品と認証制との対比も必要となるだろう。

フェアトレード認証は、1989年に設立されたWFTO（世界フェアトレード機関）に加盟し、生産者の労働条件、賃金、児童労働、

環境などに関して基準を満たしていることを認められた団体が取得できるマーク、1997年に日本の組織を含む14のフェアトレードラベル認証機関を束ねる組織としてのFLO（国際フェアトレードラベル機構）の基準を満たしたマークと二種類の認証制がある。これは、コーヒーや紅茶や食品に多く用いられ、比較的小規模のNGO団体が扱う布製品や小物には適用されていないというしくみになっている。先述したNGO等では、独自で開拓した販売ルートや支援者、客層に対して提供するには、認証制に通じないほうが都合がよい場合も多いという。

こうした世界貿易額では0.01%に満たないとされるフェアトレードの活動の一方、現在TPP（環太平洋戦略的経済連携協定）の交渉が進められている中、デイヴィッド・リカードの比較優位理論にもとづく自由貿易の推進は、同時に世界貿易システムとして地球規模の経済をすべて覆うのだろうか、という問いが生じる。オックスファム・インターナショナルは、一握りの先進国が世界貿易システムを支配しているがために、格差は増大しているとしている。

リカード流の自由貿易論に対する経済学者にフリードリッヒ・リストがいるが、国の関税による保護主義を、社会機構・制度、宗教的道德などを考慮に入れて理論化した。ただ、保護主義は、19世紀末からのドイツにおいて、始まりにはイギリス帝国に対する通商の施策から、自国の民族主義的な支配の温床となる面が見られた。保護主義は、「消費者」よりも「市民」を重視する、左派ないしは中道左派の平等主義的自由主義が見せる経済的な相貌であることを示してもいるという。

フェアトレードが誕生した背景には、開発経済のなかでの先進国開発援助からの脱却といった側面がある。地球市民としてある倫理

的消費を伴う生産者への配慮という面があるだろう。

2013年4月にバングラデシュのダッカにおいて、衣料品工場が入るビルが倒壊し、1000人を超える労働者の死亡、2500人以上が負傷したという事故が起きた。ヨーロッパのファストファッションの生産拠点という建物でもあり、労働環境と生産現場の環境の在り方を浮彫りにした。事故後の5月には、バングラデシュ衣料品産業労働者組合やその他のNGOが働きかけ、大手の多国籍ファッションブランドが工場の安全基準を守る責任を持つ「バングラデシュ安全協定」に署名することにもつながった。

大量生産の現場に飲まれることなく、生産者が自立し、協同組合を作り、地域における医療制度や教育制度、社会保障制度の充実を図るという方向性を図る仕組みとして、フェアトレードを目指すことがより強調されてきたとも言えるだろう。

その一方において、主に新自由主義を信奉している論者からは、生産者を農業や付加価値が低い活動に閉じ込めているのではないか、貧困削減に本当に寄与するのか、認証にあって不正はないのか、消費者の選択の幅を狭めるのではないか、といった反論も出ている。

フェアトレードの始まりは主に慈善事業として第三世界からの移民の人々が製作した日用品等を販売したこと、国際連帯として一次産品を支援すること等の歴史があるということを考えてみると、こうした批判自体が出る場とは別の支援体系として見ていくべきであろうし、産品の価値についてはそれ自体がフェアトレードの重要な論点である。

確かに、認証制ができたことで広く知られるきっかけになり、またタウン化することでも、グローバルな実情のなかにおいて公正な

生産を支持する産品を、地域のなかで知っていくことになるだろう。

3. ソーシャル・ビジネス

インドの植民地解放と民族的運動のカリスマ的指導者としての側面も持つモハンダース・カラムチャンド・ガンディーは、糸紡ぎ車の主張として、機械の使用による近代的工業生産への反対、農業村落の失業への対策を打ち立てた。独立運動に結実する大衆運動を導いたスワデーシー運動²⁾は、インドの都市に住む人々に対して、外国製品よりもインドの製品を、工業製品よりも村落工業の製品を消費するよう奨励するものであり、手紡ぎ車を使って村人が紡いだより糸で織られた服を着るよう勧められていた。

アジット・K・ダースグプタはこうしたスワデーシー運動の道徳的基礎として、ガンディーは倫理的選好という概念を提供しているとしている。本質的には個人の福祉が最適に達成されるのは、主流の経済理論が示すように、一般的な予算制約のみを条件として多様な欲望の満足度を最大化しようとすることによってではなく、むしろ、ある人が、様々な欲望について熟考し、それらの中から選択しようとすることによってである。隣人の原理というものは、スワデーシーの観点からの倫理的選好の解釈に直接影響を与える。それは、地域の製品が手に入るときはいつでも他所から輸送された製品より選好されるべきだということである³⁾。

「ベンガルが、インドの他の地方や外の世界を搾取することなしに自然で自由な生活を送ろうとするのなら、とうもろこしを自らの村落で栽培するのと同様に、衣服もそこで製造しなければなりません」。(ガンディーの言)

そこでは、隣人の原理は愛国心とも言い換えられる。価格や品質よりも、財の束に対する個人の選好の順序がここに敷かれる。

地域の製品を購入することが道徳的責務であるというガンディーの教義には、保護主義的意味があるが、そもそもガンディーは自由貿易に特に忠誠を誓ったわけではなかった。外国との競争を免れた国は存在しないという事態のなか、主権国家は、補助金と関税によって自国の保護すべき産業を守って発展してきたことをガンディーは指摘している。

しかし、消費者が倫理的選好を実践することは、それが自発的なもので、ゆえに非暴力の原理と調和するためにより良い解決策であり、貧者の利益となる可能性がいっそう高いともいう。倫理的選好の原理と調和する消費行動は、外国貿易から生じる経済的便益を破壊するのではなく、国家の健全な成長を導き、それゆえに物質的、道徳的進歩を促進するという⁴⁾。

ガンディーは、原則としてすべての国産品にこうした議論を適用する一方で、村落工業の製品だけを選び出し、特別扱いをしている。そのなかでも、カッダル（チャルカーとも言い、手紡ぎ車で村人が紡いだ糸で織られた服）は最高の位置付けをされ、スワデーシー運動は主に消費者にカッダルを着るよう奨励する方策とみなされるようになった。

また、ガンディーはそれが慈善の問題ではなく、「純粋に商業的な事柄」であることを強調し、それはある人が消費の束を選択する際に倫理的選好を実践することだけであった。これは、都市の人々が村人たちに負っている負債を支払う適切な手段として、手紡ぎ糸の布地を使用するということである。ガンディーの見積もりではインドには一年のうち少なくとも4か月は仕事のない貧者が多数おり、インドの人口の4分の3がこの範疇に属

しているため、この貧困状況、農村の失業に対する解決策として布地を使用することを打ち出した。農村は季節労働であるうえに、ひとたび不作や飢饉が起これば、非自発的失業の程度は一層大きくなり、多くが飢えや病気で亡くなった。

糸紡ぎは、半飢餓状態で半雇用状態の無数の人々に、飢餓に対する保険とともに、パートタイムの雇用手段を提供した。ガンディーは、糸紡ぎを村落の職人に対する雇用の手段というよりも、主として農業に対する補完産業とみなしていた。

糸紡ぎ以外にも、牧畜や機織りも代替産業とされていたが、多数の農村住民が習得可能で容易、低費用の設備だけが必要となる糸紡ぎが、もっとも有効な経済的手段とされたのだった。

しかし、都市住民へ村落手工業品の展示会などを通じて普及への道筋がたてられたが、カッダルの需要は最初の激増ののち、劇的な上昇をみせることはなかったという。工場制布地は、商品を宣伝するための独自の代理店と固有の方法を持っているが、カッダルのための市場は存在しなかった。ゆえに、村落での手紡ぎの布地を増加させようという努力が成功をおさめたような国内各地では、売れ残りの在庫が溜り始めたという。

このようなガンディーの思想実践には、現在のフェアトレードの源流となるような発想方法、また慈善よりも倫理的選好というビジネスにつながる側面を抉り出していると言える。同時に、独立民族運動というナショナリズムのなかで追求されていく経済実践が、フェアトレードには敷かれている地球市民的倫理という現在の価値観と連動しうるのか、という問いかけが必要となる。グローバルな課題を解決する新たな経済システムとして見られる、ソーシャル・ビジネスとも言い換え

ることができるだろう。

ソーシャル・ビジネスとは、ほぼすべての民間企業を指す、利潤を最大化する従来型のビジネスとも、慈善的な寄付に頼る非営利組織とも異なる新しい事業形態である。ソーシャル・ビジネスは、利潤追求の外側にあり、商品やサービスの製造・販売など、ビジネスの手法を用いて社会問題を解決することを目的とする。企業の社会的責任（Corporate Social Responsibility-CSR）とも混同されやすいが、利潤最大化企業が地域社会に貢献するために確保している慈善基金等は、病院や学校に資金を寄付したり、貧しい子供たちに奨学金を提供したり、地域の浜辺や公園の清掃活動のスポンサーになったりするのであるが、それによって消費者への企業のイメージアップをはかることが目的となっている。それに対し、ソーシャル・ビジネスは、貧しい人々の経済的・社会的な境遇の改善など、よりよい社会づくりに直結しているという。

以上がグラミン銀行の創始者、ムハマド・ユヌスのソーシャル・ビジネスの見方である。グラミン銀行は、貧困者の顧客を対象に、ベンガル語で「村の銀行」を意味し、バングラデシュの全国的な銀行となっている。800万人の借り手のうち、97パーセントが女性であるという。男性の借り手よりも女性の借り手のほうがはるかに家庭に利益をもたらし、まっさきに子供の利益につながり、貧困から抜け出す意欲が強いという。バングラデシュの農村部の女性に融資をすることは、社会全体の貧困と闘う何よりの方法であるという。こうした少額の無担保融資は世界中に広がっており、ニューヨーク市でも「グラミン・アメリカ」というプログラムが実施されており、シングル・マザーが多く含まれる地元の女性の小事業開始、既存の事業拡大に役立てられている。

アメリカで活動されて広がった試みとしてフード・バンクがあったが、期限切れの食品やへこんだパッケージ、ラベルを間違えた商品など、売り物にならない食糧をスーパーマーケットから寄付されて、お腹を空かせた人々に配給していた。しかし、2009年秋には、アメリカの多くのフード・バンクが寄付不足を訴えた。そうした「売り物にならない」商品を定価の3-4割で買い取る新しいビジネスが生まれ、中間業者が買い取った商品を格安店に販売し、格安店は通常価格よりも大幅に値引きして売するという。ここから、利潤最大化企業の善意を頼りにして貧しい人々のニーズを満たすことはある意味で危険でもあり、利益と人間のニーズが対立すれば、勝つのは利益のほうで、人間のニーズは二の次にされてしまう点を考慮にいけないとわかるだろう。

バングラデシュで行われたグラミン銀行は、単なる金融サービスではなく健康や社会問題に関わるようになり、グラミン関連企業ができいったという。子供たちに不足しがちな栄養素が詰まったヨーグルトを提供する企業として、フランスの乳業会社との合併で設立した「グラミン・ダノン」。バングラデシュ全土に近代的な通信・技術を届ける「グラミン・テレコム」と「グラミン・フォン」。グラミン銀行の借り手たちは、銀行から借りたお金で携帯電話を買い、テレフォン・レディとなり、電話を持たない村人に通話ベースで電話サービスを販売している。このプログラムで40万人以上のテレフォン・レディが生まれた。家庭用ソーラーシステム会社としての「グラミン・シャクティ」。さらに、家庭用コンロやバイオガス装置の稼働も開始されている。医療サービスの「グラミン・カルヤン」。グラミン銀行の借り手や村の住人たちに低価格で良質な医療サービスを、54の診

療所の運営、健康保険プログラムなどで行う。漁業、畜産財団の「グラミン・モーショール・パシューサムパッド財団」。政府機関のずさんな管理によって瀕死状態にあったバングラデシュ北部と西部の約1000か所の養魚場を管理しており、2009年時点で3000人の貧しい人々が携わり、年間2000トンの魚の水揚げの半分近くを代金の代わりに受け取っている。2000年には畜産プログラムが追加され、研修、ワクチン、獣医医療などの提供も行っている。酪農業を始める貧しい女性の支援や既存の酪農業の改善や拡大も行っている。幼児教育クラスなどを通じてグラミン銀行の借り手の子供たちに教育提供をする「グラミン・シッカ」。奨学金プログラムも設立し、2009年までに2500人の子供たちに提供している。手の込んだ綿の織物や衣服を生産するバングラデシュ伝統の手織産業を復興・近代化する目的で設立された織物会社である「グラミン・ウドーグ」。ここでは、地元の織り手たちが新しい織物製品を「グラミン・チェック」という統一ブランド名で国際市場に販売する支援を行っている。裸足で感染病にかかる子供のためにも必要な靴の提供の「グラミン・アディダス」、情報技術・通信技術提供の「グラミン・インテル」、ドイツのBASFとグラミンの合弁事業で防虫処理を施した蚊帳の生産、水のヒ素汚染に対し、フランスの水事業会社との合弁で飲料水を提供する「グラミン・ヴォオリア・ウォーター・カンパニー」などもある⁵⁾。

ソーシャル・ビジネスは、持続可能であり、顧客、販売店、地域住民に大きなメリットをもたらすという面があるが、所有者や資本投資家に配当金がないという面は経済的利益ではなく、社会的利益を追求するという目的がある。

4. 布の象徴作用

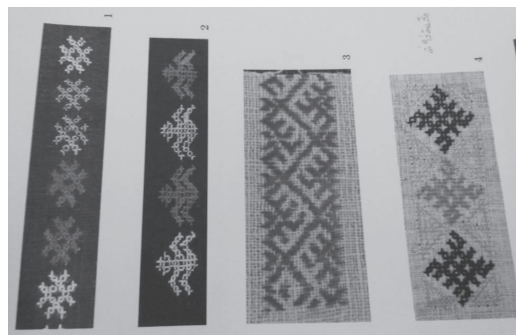
あるプロジェクトには、特に開発のような第三世界の国の政策には、明確なビジョンが必要とされる。むしろそういったなかで、発生当初の事態からまるで方向性を明確に見定めていたようなプロジェクトがあった。

いまでこそソーシャル・ビジネスという考え方や実践方法は、一定程度の認知度を得ているだろうが、フェアトレードがそうであったことと同じように、経済開発を目指す方向性のなかで零れ落ちてしまう事態を打開しようと試みた保健医療や教育といった環境や人間開発などに関わるプロジェクトが、その活動と連動した地域の産品と云えるものを商品取引として取り扱う方向が徐々に見えてきたという。

そのようななかで、地域の資源、協働関係、社会貢献、担い手の自己実現といった関連のあるビジネスを展開するものを、ソーシャル・ビジネスと呼ぶようになった。

タイ、パヤオ県チェンカム群メータム村にあるバーントーファン（Baan Tho Fan）というNGO兼人々の集まりが多くを教えてくれるだろう。

このプロジェクトは、女性たちが農業を守り、出稼ぎを防止する目的のために副収入を創出する活動として1995年に始まった。1980年代、日本へのルートもあるような、性産業



タイ、ヤオ族の刺繍

に送り込まれることを防止し⁶⁾、若い女性たちに教育や職業訓練の活動を始めた女性がいる。

そこで洋裁訓練を終了した女性たちのなかには、都会に働きに行き、稼ぎの割の良い性産業に行ってしまうという事態も起こった。そこで、地元で仕事を創出するという目的を持った事業を始めたのである。最初は女性たちの村から離れたところにある創設者の女性のもとで行っていたが、彼女たちは通うバイクが無い状況や、毎日仕事に来られないなどの悩みがあり、自分たちの村で独立するようになった。メンバーの女性たちのなかの誰かの家などを転々として作業を進めていたが、その後作業所を建てることができた。

少数民族のヤオ族の刺繍をあしらった鞆や小物類を製作し主に日本で販売している。これは、同郡の山地に住む少数民族の女性たちへの経済的支援にもなっている。刺繍グループは40名ほどいるが、こうした人々の子供たちへの奨学金支援も始まっている。海外に出稼ぎに行く人もいたり、また他地方へ豆乳を売りに行った人もいるという。ヤオ族の刺繍には、ライソーという技術が宿り、一つ一つの柄には、とうもろこし、虎の足跡、魚といった象徴的意味が込められている。

2003年にはOTOP (One Tambon One Product Concept 一区一品運動) 商品として認可も受けている。OTOPとは、2001年10月に開始され、タクシン・シナワット政権時に、一地区に100万バーツ(約300万円)を投じて農村を活性化することで、都市と農村との格差を解消するために、大分県の「一村一品運動」⁷⁾に習って政府が主導したプロジェクトである。実は、後に物価上昇が起こった事情もあった。こうしたなかにおいて群レベルの製品のなかに、メータムグループの製品が選ばれていた。

また、利益の一部を地域の福祉に還元する活動も行っている。メータムグループは、地元の材料を用い、少数民族の伝統文化の継承をし、丁寧な布製品を仕上げるという仕事の本質をつく品物を提供する。

以下、いくつかの質問をし、二名のスタッフにインタビューをした。

1. ミシンはどこから仕入れたのか？

○中国産のもの、日本の会社のものもあったが、タイ国内で出回っている製品であり、チャンカム(近くの町の名前)で購入した。

2. 農業と縫製の仕事とどちらのほうが好ましいか？

○農業は職業。田んぼもしており、果物の木も育てている。

縫製は副収入としての役割がある。しかし、決して辞めたいとは思わない仕事であり、続けたい。最初から友人と一緒にやろうと決め、始めたので、このプロジェクトを辞めるのは惜しい。15歳からやっている。

型紙を作ってやるのだが、その過程で合ったものをつくるのが難しい。

○縫製の仕事のほうがよい。17歳からやっている。特にズボンを縫うのが難しい。新しいデザインを試して製品化するとき、ボタンやポケットを付けるなど、気が張る。また、小物やバックの縁どりのところがややこしい。ファスナーを付けることなど、ゆがんだり、まっすぐしたりするのをすんなりこなすのはややこしいところがある。

既にあるデザインの注文のほうがやりやすいが、新しいものを注文してこれ

ることもある。

○型紙は自分たちで作る。以前は藍染や黒い布をビルマから、またラオス国境のモン族の人たちから購入していた。現在は、あずき色やグレー、少しくすんだ草木染の手作りの布をメースワイの女性から仕入れている。

3. 新しい人が入ってきたり、子供たちが研修として訪れることもあるが、教えるときに難しいことは何か。

○最初は行程を覚えるまでに時間がかかる。また、数が多いので、持続する気持ちがないと出来にくい。覚えられないと難しい。

○工場の下請けの仕事は、縦線で縫うものが多いが多少まがってもいい。ここの製品は種類が多いし、正確さを要求される。弧を描いたり、ポケットの処理をしたりするといった細かいところが多く、好きじゃないと出来ない仕事。だからこそ難しいものもやってやろうという気になる。

○注文が来て、見本がくると、最初はすぐにはできないが、何とかして試みるとできるようになっている。新しいものに挑戦する好奇心や、もっとやってみたいという気持ちが出てくる。

○長年やってきてみて、今は、市場（いちば）で布製品の小物があつたら、それがどうやってできているのかわかるようになった。

○工場の仕事を選んで2-3年離れてしまった人は、もうここの仕事はできないのではないか。工場の仕事の人は、夜10時か11時まで一日中座っており、出血した人を知っている。ただ稼ぐだけで、技術は残っていないのではないか。

○ここの仕事は立ったり座ったり、歩いたりして健康を保てる。

○しかし、工場労働へ移った人は、逆に、ここの仕事は成長していないという言い方をする。

○この仕事が無くなったらどうしようか迷っている。自分で製品を作って売ろうかとも思っている。（今でも知り合いに頼まれると作っている）。

4. 自分が創ったものを持っていて使っている人がいたらどう思うか？

○バックなど、使っている人を見たら誇りに思う。

○以前にOTOP（一村一品運動）に選ばれ、チェンカムに行き、県の販売店に委託販売として製品を置いていたら、自分たちの製品のデザインを真似てより安く作って置いている店が出てきた。

○店で、日焼けをして古くなり、色が褪せたものもあつて置かないようにした。

○ヤオ族の刺繍はあまりないが、モン族（中国系）の衣装を切り貼り（パッチワーク）した製品はよく見かける。

○製品のコースターは、マネができない。

5. OTOP（一区一品運動）によって何かが変わったのか？

○最初は刺激があり、やる気が出たが、仕事の量が増えた。

○縫製技術の向上は望めたが、きちんとしないと技術的にいいものを出さないといけないというプレッシャーは増えた。

○研修や講義などに参加して刺激になったが、最近あまりない。

○日本で買ってくれる人たちの要望でこちらの技術も向上した部分もある。

6. 洋服づくりはしたいか？（プロジェクトで頼まれるものは小物やバックなどである）。

○既に作っているし、知り合いに頼まれると作り上げている。

○簡素なものは作りたい

○型紙や材料費が高いものであるとそれをより高く売れるか心配なので、やりにくい。（ほとんど近所の人たち相手なので）。

7. 村の外、もしくは海外に出たいと思わないか？

○遠くに行くと、すぐに家に帰りたくなった。

○10年間バンコクで働いていたが、もう行きたいとは思わない。

8. 伝統を受け継いで、守っているという意識はあるか？

○ヤオ族の刺繍をやっている人たちがいなかったら、子供たちにも伝えるということが廃れてしまう。

○常に意識して仕事をしている。

9. ここで働くことについて家族はどう思っているか？

○子供はああ、母が働いているなあと思っていると思う。何も言わない。

両親は家が違うので何も言わない。夫は、以前はあまりいい顔をしないでやるなど言っていたが、今は意識が変わった。○仕事があることがいいのではないかと理容師の夫は言っている。

両親や、夫の両親は家が近くにあり、よく通い世話もしている。

○他のスタッフも、夫は何も言わないで健康に関して心配をしている人もいる

が、夫がやるなど言ってきた人もある。

10. 地域のなかでどう感じているか？コミュニティという感覚はどれくらいまで持っているか？

○同じ田んぼの続く3-4村の人たちはほとんどが知り合い。一つの村よりも広い地域をコミュニティと思う。

○少し離れた夫の村までが知り合いだが、一つの村よりも狭い感覚。家族の及ぶ範囲がコミュニティ。

11. 製品を通じて海外とつながっているということについてどう思うか？

○うれしい。日本の友人がいるのはいい。

○うれしい。普段生活していたら会えない。日本に行く機会があったとき、何かのついでに電話などして尋ねたい。一緒に食卓を囲んだりしたことを思い出している。

○スタディーツアーなどで来られた人たちと家族のことも含めたいろいろな話をしてきた。身近に感じていることができているし、お互いに思い合うことができている。向こう側の人たちが製品を売ってくれていることがわかるから、よりこちらも頑張らないといけないと思っている。

こうしたなかには、メンバーのなかで仕事の安定を求めて離れたり、姑の介護で来れなくなったりする人もおり、少人数の作業所は決して安定的にあるというわけではないようである。タイにおける政策の一環として最低賃金が全国一律300バーツ（一日）に引き上げられていたが、北部タイでは、零細企業や農民は追いつめられる事態があるという。

バートーファンにおいても、刺繍代、縫製代は、最低賃金に達してはいないという。一日他の用事もせずに集中して縫製しても、一日200パーツにもならない。それ故に夫からは辞めろと言われる人もいたという。その他、注文する商品の種類も増え、それぞれに異なる技術が要求され、人を増やそうとしてもなかなかうまくは行かない実情がある。

注文数も少量で種類がバラバラ、色もバラバラ、ゆえに作業の手順も工場生産のようにはいかず、非効率的である。細かく高い縫製技術が要求されるうえに数量が少なく、一つずつ縫わざるを得ない。非効率的で縫製費が安いとなると、みんなの士気も下がり、新しい人が入ってきても長くはもたないという。工場の下請けの仕事と比べても、その3割ほどの給料となり、それほどでもない時期もある。

ただ、タイの国王が提唱されているという「充足経済（ほどほどに満足する）」という価値観、生き方を選ぶ人もあるというなか、バートーファンはこうした充足経済に相応しい働き方とも言えるという。

5. オルタナティブな構造の在り様

フィリピン、マニラにあるランパラハウスは主に日本にエンターテイナーとして働きに来て子供も生まれ、帰国して生活しているシングルマザーが中心になって、織物の縫製をしている施設である。職業用ミシンが3台並び、対面には作業台があり、その奥には料理場があり、生活と仕事を女性たちがその場でやっている。

1990年代に日本に来て、パブやスナックで働き、同伴なども多くこなす仕事のなかで、子供も出来たが、こうした女性たちを主に法制度的側面でフィリピンで支えるバティスというNGOがあり、JFC（ジャパニーズフィリピーノチルドレン）の子供たちのピア

グループも出来ている。また、こうしたグループのなかには演劇による社会啓発活動も行っているものもある。

日本においても外国籍女性は、ドメスティック・バイオレンスに遭った場合など、母子生活支援施設で暮らしながら、生活保護を受けたり就労したり、多くの支援を受けながら生活を確保している。そうした場合、親権の訴訟や子供の学習支援など、身近で相談し、同行してくれる支援者がいないと暮らしが成り立たない場合が多い。

こうしたNGOとの連携がありながら、ランパラハウスでは、日本の支援者からの注文、またJICA（国際協力事業団）からの注文などをこなしながら、縫製品を仕上げている。2015年3月に筆者がランパラハウスに訪問した時には、JICAから会議等で配布する簡易バッグを注文され、500個ほどを一週間で仕上げるという仕事に取り掛かっていた。簡易なものだが、フィリピン・ルソン島の縞柄をポケットにし、商標も付けるという作業を延々と少人数でこなしていた。型紙づくりから裁断、縫製、仕上げまで、どれも納期より早く作るようにしていた。

このようなやり方は、バートーファンでのインタビューにも見られるように、工場での時間制限の厳しい仕事のやり方と職人肌気質で丁寧にゆっくり仕上げるやり方として対



フィリピン、ランパラハウスの縫製品

比されるだろう。

日本で見るフェアトレード製品でも多くみられるネパール産製品のなかにも、こういったジェンダー構造に配慮したものがある。ネパールは、インドに女性が人身売買されるといった事態が続いているが、1996年にインドの警察の一斉捜査が入ったところ、500人が18歳以下であったという。ネパール政府側は帰国を拒否するという状況になっていたが、シャクティ・サムハというNGOは、こうした人身売買に遭った女性たちへの支援と女性たち自身が仕立てる織物や小物、アクセサリーなどをフェアトレードとして販売している。実は、SEPOM (Self-empowerment program of migrant women) というタイで日本への移住で性産業に行き帰ってきた女性たちへのサポートをしているNGOの当事者スタッフは、このシャクティ・サムハのメンバーと交流し、共に研修を行ったこともあるという。織物についても、日本のさをり織⁸⁾という簡易で色とりどりの製品ができる方法を日本の支援者たちが伝えていき、縫製品としてフィリピン(上述のNGOなど)で加工するという流れも出来ている。やはり、人身売買に遭うという事態のなかで、こうした支援には、女性が自分自身への信頼を取り戻すという権利意識の必要性が問われているが、そのなかで、こうした縫製品の作業は、何事にも代えがたい作品としての成立の時間を作り出しているところがあるだろう。

私たちは、普段、労働と資本は象徴様式であるということを忘れている。フェアトレードにおいて生産、消費をするというサイクルは、市民的な人々の交流という面もありながら、商品のフェティシズムはいかに私たちが資本の作り手であるのか、という面を忘れさせていくこともある。

こうしたなかにおいて、フェアトレードが

社会倫理性を見出し、グローバル社会のなかで地球市民という理想性を追求することをどう考えたらいだろうか。

ドゥルシラ・コーネルは、道具的理性が引き起こした悪夢を描く「啓蒙の弁証法」⁹⁾の世界のなかでも、象徴様式が自己進化ではなく、多彩性や生気にあふれる様式のユートピアに賭けることができ、啓蒙の哲学それ自体にこうした様式が埋め込まれていると述べる。後期資本主義のなかに投げ込まれていると、人間はシニカルで、自己利益を追求する生物であり、リスクを最小限にして富を最大化するイメージで描かれ、ダーウィニズムの誤った導かれ方をする社会生物学の波に飲み込まれるとされる。

しかし同時に、象徴様式の多数性は、イマニュエル・カントの人間性の理想につながることにともなうという。他者の立場や見識から世界を見ることを尊重するということは、フェアトレードの世界観の基本にあるのだろうが、それだけではなく、象徴様式の不可欠な多数性を尊重することを学ぶ必要があるという。これは、一方のみが行う非合理的な比較を通じるのではなく、それ自身のなかにある論理を象徴様式から読み取ることである。近代性は終わりのないプロジェクトとしてあり、ポスト植民地が引き続く世界で続けられるが、より公正な世界のために終わりのない象徴性の創造のプロジェクトも広がっているのだ¹⁰⁾。

効率性が最大化するという側面に対し、どうしたらいいのか、という点は、文化というものは物質世界と分離できず、人間の活動と考えられているものは物質であり、それは象徴化の媒介を経て私たちの前に現れるという見方に続くだろう。ファブリック製品が目の前に販売され、それを身につけるという過程は、それ自体である象徴様式であり、もしそ

れに意味の多様なあり方を見出すのなら、人はその象徴様式を通じて出会う世界を想像することができる。

発展途上国の紡績業の大規模工場における人権侵害は指摘されているが、ブランドがある衣服のなかでそのような見方がなされるか、という点もまだ解明されてはいない。しかし同時にほとんどのファッション店でどのように生地が生産されているか、というところまで見出すことは不可能である。消費者は、実際の生産過程からは引き離されている。

生地において、合成繊維以外は持続可能な資材ではあるが、コットン（綿）は多くの化学肥料を用い、水資源が足りず、エネルギー消費率が高いため、農民や加工過程に関わる労働者を危険にさらす。フェアトレードの規制をかけ、オーガニック綿や麻で代用することで、別の方向性が見出せるとも言えるだろう。

6. おわりに

フェアトレードの移行のなかには、ソーシャル・ビジネスや地域おこしといった活動との結びつきがありながら、地球市民の倫理という考え方が敷かれていると言うことができる。縫製品の原材料から、ほぼ手作業である製造過程、販売、といった過程に想いを馳せるといふ消費者の在り方は、今後の社会経済的側面を組み替える可能性も少なからずあるだろう。

本稿で紹介したパーントーファンなどの取り組みは、フェアと呼ばれる社会公正の懸け橋を試み、また、自然のリズムに沿った点を大切にしていたと言えよう。

フェアトレード販売をされている方々、N G Oで支援の働きをされている方々の多くにインタビュー等において大変お世話になりました。記して感謝申し上げます。

注

- 1) イギリス北部ランカシャー州の人口5000人の町ガースタングでは、獣医によってガーナ産のチョコレートやコーヒーが町のあちこちで販売されるようになった。フェアトレード・タウンとしての動向は1997年あたりから始まっていったと言われる。
- 2) 1885年にインド知識人階級の政治参加を促すために創設されたインドの主要な政党の国民会議派がガンディーの指導下で実施した大衆運動である。国民会議派は当初は親英的性格であったが、19世紀末に急進派が台頭すると自治、独立を掲げるようになり、ガンディーの非暴力不服従運動などを通じて独立運動の母体となった。スワデーシーの文字通りと意味は「自らの国」であり、国産品愛用や経済的自立を指す。
- 3) 『ガンディーの経済学』41頁－43頁
- 4) 『ガンディーの経済学』46頁－47頁
- 5) 『ソーシャル・ビジネス革命』31頁－68頁
- 6) 同時期には、タイでDEP (Daughters Education Program) というN G Oが設立していた。(第2章「娘たちの教育プログラム (DEP) の活動より」『媒介者の思想』参照)
- 7) 大分県の大山や湯布院で始まった、多品目の作物を生産し、消費者に直接販売するシステムを作り農家所得を上げたり、自然と生活が一体化する観光地づくりなどから地域おこしを行う運動。1981年から顕賞活動も行われるようになった。(「一村一品運動研究の回顧と展望」『金城学院大学論集第11巻第2号』より)
- 8) 1968年に大阪で城みさをによって始められた手織りの手法。常識や既成概念にとらわれずに自由に織ることで、独自の感性を引き出すという。障がい者施設等でも行われている。
- 9) マックス・ホルクハイマーとテオドル・アドルノによる『啓蒙の弁証法』では、人間が恐れから解放され、自身の主権を確立させるための神話的啓蒙が性的差異を隠蔽しながら描かれている。
- 10) "Symbolic Forms for a New Humanity" pp92－94

【参考文献】

足立文彦「一村一品運動研究の回顧と展望」、『金城学院大学論集・社会科学編・第11巻第2号』

2015年3月

- アジット・K・ダースグプタ著、石井一也監訳、坂井広明・小畑俊太郎・太子堂正称・前田幸男・森達也訳『ガンディーの経済学—倫理の復権を目指して』作品社2010年
- ムハマド・ユヌス著、岡田昌治監修、千葉敏生訳『ソーシャル・ビジネス革命—世界の課題を解決する新たな経済システム』早川書房、2010年
- デイヴィッド・ランサム、市橋秀夫訳『フェア・トレードとは何か』青土社、2004年
- ジョセフ・スティグリッツ、アンドリュー・チャールストン、浦田秀次郎監訳・解説、高遠裕子訳『フェアトレード—格差を生まない経済システム』日本経済新聞出版社、2007年
- オックスファム・インターナショナル、渡辺龍也訳『貧富・公正貿易・NGO—WTOに挑む国際NGOオックスファムの戦略』新評論、2006年
- マイケル・ブラット・ブラウン、青山薫・市橋秀夫訳『フェア・トレード—公正なる貿易を求めて』新評論、1998年
- フレックス・ニコルズ／シャーロット・オパール編著、北澤肯訳『フェアトレード—倫理的な消費が経済を変える』岩波書店、2009年
- E.トッドほか『自由貿易という幻想—リストとケインズから「保護貿易」を再考する』藤原書店、2011年
- 渡辺龍也『フェアトレード学—私たちが創る新経済秩序』新評論、2010年
- 高原幸子『媒介者の思想』ふくろう出版、2006年
- Harriet Lamb "Fighting the banana wars and other fairtrade battles", Fairtrade Foundation, 2008
- Ruth Singer "Sew Eco-Sewing sustainable and re-used materials" A&C Black, London, 2010
- Drucilla Cornell and Kenneth Michael Panfilo "Symbolic Forms for a New Humanity-Cultural and Racial Reconfigurations of Critical Theory" Fordham University Press, 2010